

江戸時代の出版文化と都市

中島直子

I はじめに

わが国の出版技術は、聖徳太子の三経義疏を初めとする手書、7～8世紀に唐より伝来した整版印刷、そして明治以降の活版印刷という形態をとり発達してきた。

本稿で取り上げる江戸時代は木版印刷術による整版印刷本の時期であり、社会的には、古代から中世までの貴族・僧侶を出版主体とする非営利的開版（印刷に板木を使用し書物を出版する意）の歴史に、営利的民間出版業が小規模ながら徐々に、加わり始める（寛永年代<1624～44>）時期であった。すなわち、出版物が商品として流通し、出版業が経済的機能を持つに到った時代である。

また、この期の業者は、出版業の他に、小売・古本売買をも行なうのが普通であったと言われる。¹⁾

「江戸時代の出版」というテーマは、ただ出版技術を云々するだけの問題ではない。元禄期から化政期へかけての上方から江戸への文化中心の遷移や多核化を究明する歴史学の分野においても、また文学史や近世文化論その他の立場からも興味深い対象であろう。そして、筆者は都市研究の立場よりこの問題を取り扱う。

現代社会における情報・管理機能や文化の核としての東京の首位性は、多くの人が認めるところである。日本の出版社総数2,160社（出版ニュース社、1965.3）に占める東京・大阪の割合は83%・5%で、残りの276社が他の都市に散在している。東京のこの首位性はいったいいつ頃迄溯れるのか。近世において出版は地方の城下町でも行なわれたのか。このような問いから本稿の動機は生じているのである。

以下、主として、江戸時代の出版地・版元数（出版者数）・出版物の概要から、そこに現われたわが国近世の全国都市の状況及び特色を述べてみる。

II 調査方法

江戸時代の出版物を出版地、版元別に重複なく網羅した総目録は、未だ編纂されていない。筆者は、矢島玄亮編（1976）「徳川時代の出版物・出版者集覧（全2巻）²⁾」（仙台万葉堂）を資料とし出版地別に出版者数を数え上げ、個々の都市のおよその文化度を計った。なお出版地の記載されない版元は除いた。資料は、ほぼ全国を網羅する既存の51の目録の集覧であるため、出版者の重複や個々の目録のもつ専門的・地域的偏在性や、地名の不統一性などの欠点があるのは否定できないが、これ

1) 世界大百科事典（平凡社）、p.171（内田芳美執筆）

2) 発行者は徳川時代出版者出版物集覧刊行会（東北大学付属図書館内）。

らを考慮しても本稿の分析には有効であり、地名は統一させてこの資料を用い、分析を進めることにした。資料には慶長年代（17世紀初め）から慶応年代（19世紀後半）までの約270年間の出版物約17,000点が収められている。

Ⅲ 出版地の分布と版元数

(1) 出版地分布

資料に国名か町名が記載された3,653の総出版者延数を153の出版地別にまとめたのが表1であり、出版地点が明らかな111点を図化したのが図1である。

北は弘前・盛岡・一関・岩谷堂（現江刺市）から南は長崎・熊本・高知に到るまで、北海道を除く各地に出版地が点在しており、南北へ行くに従い、分布は疎になる傾向がある。信州善光寺・松本・津山（岡山県）など内陸部にも街道に沿って分布する。図1のA地域に示される大坂・京都・和歌山・奈良・伊勢山田・松坂・津・伊賀上野・琵琶湖周辺から尾張へと連なる範囲は、版元数・出版物数において、関東地方よりはるかに大規模であり、山陽道に沿って神戸・須磨・明石・岡山・倉敷・福山



図1 江戸時代の版元所在地

表1 出版地と版元数

出版地	分類	版元数	出版地	分類	版元数	出版地	分類	版元数
京都		1,449	甲府	城	3	播州*		2
江戸		1,039	博多	城・港	3	武州*		2
大坂		743	白河	城	3	東武		2
名古屋	城	72	松本	城	3	武城		2
仙台	城	30	米沢	城	3	大和*		2
広島	城	19	新潟	港	3	陸前*		2
伊勢山田	宗	18	彦根	城	3	弘前	城	1
金沢	城	14	久保田		3	一関	宗	1
長崎	港	13	熊本	城	3	石巻	港	1
和歌山	城	12	塩釜	港	3	石川*		1
津	城・港	10	山形	城	3	陸奥信夫郡		1
奈良	宗	7	駿府	城	3	徳山	城	1
水戸	城	6	駿河*		3	高槻	城	1
高野山	宗	5	備中成羽	城	3	岸和田	城	1
姫路	城	5	摂州*		2	明石	城	1
横浜	港	5	陸中岩谷堂		2	宇治	宗	1
有馬*	湯	5	松江	城・港	2	山城*		1
信州		5	下総*		2	河内*		1
界	港	4	会津	城	2	今津	港	1
日光	宗	4	高知	城	2	撰陽		1
松坂	城	4	伊予*		2	粉河	宗	1
伏見		4	松山*	城	2	倉敷	港	1
盛岡*	城	4	美作*		2	南勢*		1
南紀*		4	鎌倉		2	西京		1
美濃	城	4	伊賀上野	城	2	岡山	城	1
神戸	港	4	芸州御手洗	港	2	須磨浦	港	1

1) 分類欄の略字の意味は次の通り。城：城下町，宗：宗教都市，港：港町，湯：湯治場，宿：宿場町。

2) 分類欄の空白は分類不能を示す。

3) *印は旧国名など。

出版地	分類	版元数	出版地	分類	版元数	出版地	分類	版元数
大和初瀬	宗	1	周防*		1	沼津		1
赤穂*	城	1	宇都宮	城	1	大磯		1
三重*		1	福島上町		1	底倉*	湯	1
四日市*	港	1	佐倉	城	1	越中*		1
伊賀*		1	平	城	1	福井	城	1
丹後峰山*		1	熊谷*	宿	1	志摩		1
若狭*		1	北総*		1	作州		1
津山	城	1	上総*		1	坂本	港・宗	1
福山	城	1	成田	宗	1	武州本庄	宿	1
宮津	港	1	高崎*	城	1	下新田		1
鳥取	城	1	常陸*		1	伏陽		1
岐阜	城	1	常陸稲田		1	横山同朋町		1
雲州*		1	常陸那珂郡		1	神籬		1
雲州大東*	湯	1	銚子	港	1	水原		1
備前伊*		1	佐野*		1	難梅		1
紀伊*		1	甲斐*		1	番陽		1
阿波*		1	甲州	港	1	尾陽		1
徳島	城	1	羽州		1	甲陽		1
高松	城・港	1	羽州天童*	城	1	作江		1
丸亀	城・港	1	陸前*		1	上加	安	1
中村	港	1	上野*		1	信陽		1
今治	城・港	1	尾張小牧	城	1	元陽		1
佐賀	城	1	岡崎	城	1		浜	1
若松		1	浜松	城	1			
杵築	城	1	善光寺	宗	1			
対馬		1	伊豆三島	宗	1	合計		3,653

表2 近畿地方における出版地別版元数

出版地	版元数	出版地	版元数	出版地	版元数	出版地	版元数	出版地	版元数
京 都	1,449	大 坂	743	伊勢山田	18	高野山	5	和歌山	12
伏 見	4	明 石	1	四 日 市	1	粉 河	1		
宇 治	1	須 磨 浦	1	津	10	奈 良	7		
山 城	1	神 戸	4	松 坂	4	大 和	3		
宮 津	1	有 馬	5	志 摩	1	南 紀	4		
丹後峰山	1	界	4	南 勢	1				
若 狭	1	高 槻	1	伊賀上野	2				
撰 州	3	岸 和 田	1	三 重	1				
今 津	1	河 内	1	伊 賀	1				
坂 本	1								
彦 根	3								
小 計	1,466		761		39		20		12

総 計 2,298

IV 出版地と出版物の性格

(1) 出版地の機能分類と出版物の性格

版元数の多い町はこの期の政治・経済の中心である京・大坂・江戸を頂点とする城下町・宿場町がほとんどを占めるが(表1), 門前町・港町にも特色があり, また有馬などの湯治場でも出版が行なわれている。

寺社での木版印刷術による出版の歴史は, 8世紀(「百万塔陀羅尼」, 770年)に溯り, 叡山の寺院版, 南都の春日版・高野山版, 五山版を経て江戸時代に到る。

地方の出版は, 寺社の開版による仏書・絵図・祭礼図などの非営利的の多いが, 巡拝記・名所めぐり・寺社詣に関するものに例えば, 「塩釜詣文章」(仙台・葎堂, 文政年間), 「三山詣文章」(天童・葎堂, 弘化1), 「滑稽道中宮島みやげ六冊」(広島, 嘉永4) などのような商業出版もあり, ここに, 物見遊山・参詣に代表される江戸時代庶民の活動と読書階級の広がり, そしてそれらと結びついて登場してくる出版業の発達を知ることができる。

歌集や発句集の出版も地方で多く見られ, 僧侶以外の新しい読書階級の地方での存在を暗示する。

表3 湯治場における出版物

出版地	版 元	出 版 物
有 馬	菊屋五郎兵衛	有馬山温泉小鑑(貞享2)
	一 の 湯	有馬温泉手引草
箱根底倉	つ た や	七湯のしおり

長逗留する湯治場での出版は、この時代の湯治場が文人墨客の社交の場・文化交流の場として今日とは異なる積極の意味を持っていたことを示しているのではないか。

全国諸藩の年貢米・特産物の輸送やその他の商業活動の隆盛に伴い海上輸送が盛んとなった。石巻・新潟・倉敷・御手洗³⁾・堺・坂本・中村など積出・中継の機能をもつ港町で出版物が多い傾向がみられる。

また鎖国時代に、海外への唯一の窓口であった長崎の版元数は13で、全国第9位である。「早視万国図」(異篤館出版)や「世界万国並人物図」(栄寿堂出版、天明頃)など異文化紹介的な出版物に特色がある。横浜の「横文字早学」(尾崎富五郎、慶応2)や堺の「新刊算法記」(承応2)など、取引に必要な実務的出版物にも、港町は特色がある。

(2) 江戸時代の全国都市の特色

出版文化よりみた江戸時代の全国都市の特色は、次の①～④に集約できる。

- ① 三都中心の地域構造
- ② 地方中心としての城下町・宿場町
- ③ 宗教都市の根強い存在
- ④ 港町の活況

以下、それぞれについて説明を加えることにする。

①出版物の量や版元数において、京・江戸・大坂は他の町々を抜きんじており(図3)、文学作品の多様性においても異質な存在である。この期の文化の大中心地は他の分野にあっても三都であったと考えられるが、京都こそが古代以来の広範な歴史的基盤の上に立つわが国第1の文化都市であったと言える。

②金沢・仙台・米沢・盛岡・水戸・津山・福山・松山など、三都から離れた城下町は比較的大きな出版文化の中心地であり、地方中心町としてそれぞれ地域性のある時代を反映した出版内容をもつ(表4)。

また逆に、宿場町・城下町は街道により三都と直結されているわけであり、近世的出版業は文学作品など出版物と共に都から地方へ伝播するのである。地方の珍しい名所記などは田舎から城下町へ、そして都へと伝播していく。

③伊勢神宮、奈良の東大寺・春日神社をはじめとする寺社、そして高野山が果たした役割と影響は中世・古代まで溯ることができる。しかし近世にあってもなお宗教都市が、すなわち、自らが作家であり、出版技術者であり、かつ読書階層である僧侶らが、わが国の文化活動の原動力の一分野を占めていたことは重要である。

また、庶民が、商業出版本の名所記・参拝記に刺激され、寺社が物見遊山の庶民文化の対象となる点も、わが国近世の都市の中で宗教都市(門前町も含む)がもつ特色である。

④幕藩体制の確立と共に商品流通が活発化してくると港の地位は一層重要となり、城下町で港町

3) みたらいと読む。大崎下島にあり北前船が多数入港した中継港。

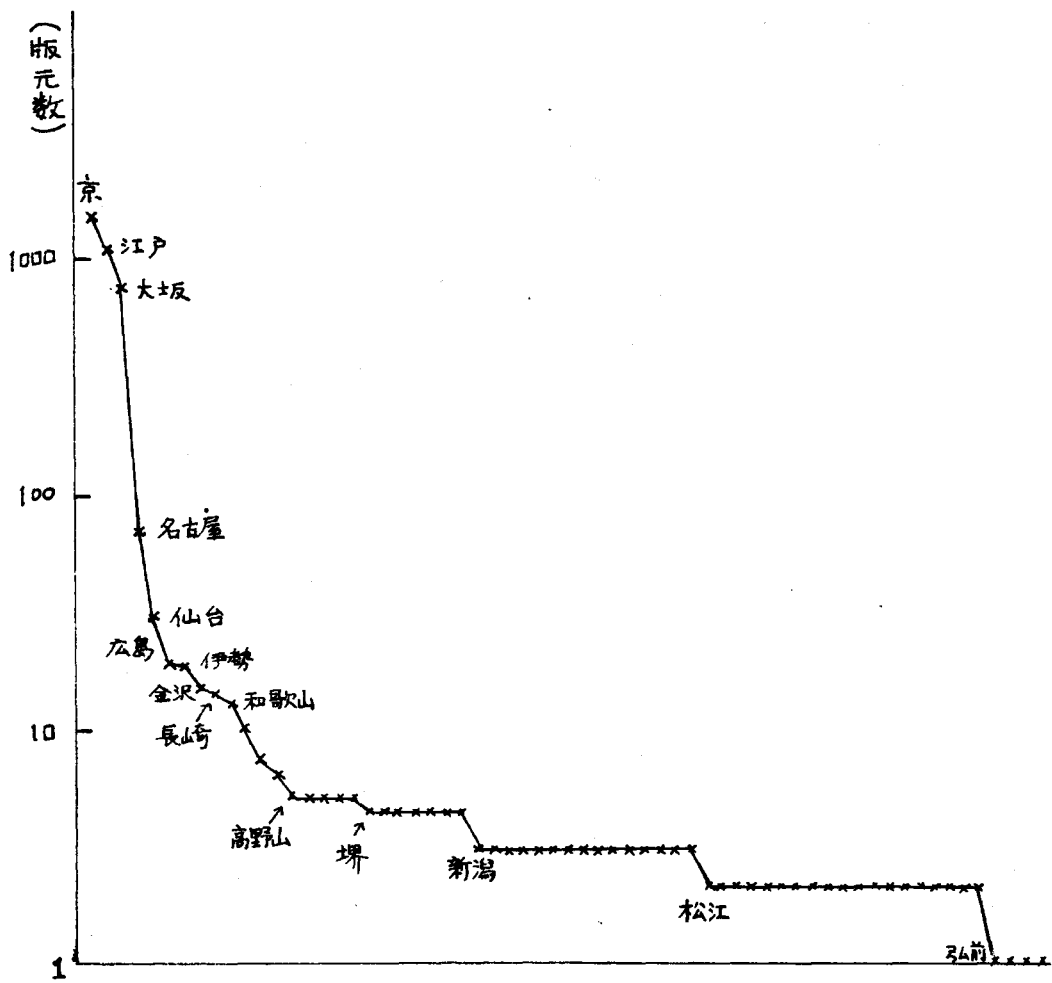


図3 文化度よりみた近世都市の構造

の機能を兼ねる都市も多くなる(表1)。又、内陸港町としての鯉沢(富士川上流)でも出版の記録がある。

鎖国時代の閉鎖的近世都市の中にあつて、他の地域からの人間・物質・情報流入の拠点となり活況を呈する港町は一般に活力にあふれ、進取の気象、合理的・実務的性格を帯びる町であつたと考えられ、この事が港町で出版物が多いという事実と何らかの関連があるものと思われる。特に長崎や開国以後の横浜・神戸は、海外文化のわが国への門戸として特殊な意味をもつ町として全国都市中に位置づけられていた。

表4 主要城下町における出版物

出版地	主な出版物	種類
名古屋	「算法円理括発」「職原図解」「砲術語選」 「将門記」「三日月集」	実務書 戦記物・俳句集
仙台	「塩松紀行」「遊松島紀」	実務書 紀行文・俳句集
広島	「敵島道芝記七巻」「玉石集」 「滑稽道中宮島みやげ」	紀行文・俳句集 滑稽本
金沢	「加賀千代尼発句集」「金沢名所杖」	名所記・俳句集
津	「日本詩史五巻」	
水戸	「水陸戦考二巻」「常陸誌料郡郷考」	実務書・地誌
姫路	「弁斥医断」「峰相記微考二巻」	
盛岡	「於曾礼山詣」	紀行文
甲府	「春夜章」	
松本	「早引節用集」「琵琶田集」	実務書・俳句集
米沢	「孝経」	儒教書
彦根	「江戸道中廻り一枚」	版画
松江	「出雲国神社巡拝記」	名所記
杵築	「辞格考抄本二巻」	
松山	「通俗算法巻之一」	実務書
丸亀	「金毘羅靈験記」	
富山	「韻学挙要」	

表5 宗教都市・門前町における出版物

出版地	版元	出版物	著者
伊勢山田	鹿島仁平治	中子乃比礼二巻	中根孝道（文化14）
奈良	伊勢屋庄八	春日大宮若宮御祭礼図三巻	藤 惇（寛保6）
	井筒屋庄八	奈良大仏・大和名所記	（明保6）
	東大寺	公慶上人年譜	大庭探柳斎（安永2）
高野山	花月堂保兵エ	高野山全図	伊藤竜山画（安政4）
	伊右エ門 （高野山経師）	野山名霊集五巻	积・茂範（宝暦2）
		四国遍路道指南	
日光	鷹橋治郎右エ門	日光山道しるべ	鷹橋義武（享保3）
塩釜	一貫堂	塩釜御遷宮御行列之図	華谷 文

V おわりに

本稿は、わが国の近世全般の全国都市の生態を考察する目的で、国文学の文献を利用したみたものであり、この種の資料の利用は都市地理学を専攻する筆者にとっては初めての試みであった。

安濃津・勢州津，京・平安・皇都・洛中，などいく組かの複数呼び名をもった町の存在は興味深い事ながら，出版地を判別する者には煩わしく感じられるので，表1は，これらを統一させた結果である。

ある程度多量の出版地・出版者を量的に把握し分析することは，江戸時代の中心都市を見出す上で有効であった。しかし，勉強不足のため整理できない出版地がいくつか残ってしまった（表1）。これらの出版地については更に検討を加えることが今後に残された課題である。

終りに，学部入学以来，現在に到るまで終始熱心にそして温かくご指導下さいました浅井辰郎教授に，本稿を謹んで献呈し，心から感謝を申し上げます。

参 考 文 献

- 中村喜代三：近世出版法の研究，丸善
西山松之助（1964）：江戸文化と地方文化，日本歴史・近世5，岩波書店
矢島玄亮（1976）：徳川時代の出版物出版者集覧，仙台万葉堂
矢島玄亮（1976）：徳川時代の出版物出版者集覧続編，仙台万葉堂
脇田 修（1976）：近世都市の建設と豪商，岩波講座日本歴史 9，pp.155~194
脇田 修他（1970）：講座日本史 4，東大出版会
藤岡謙二郎（1977）：現代都市の歴史地理学的分析，古今書院
藤岡謙二郎（1977）：日本歴史地理総論・近世編，吉川弘文館
藤本利治（1970）：門前町，古今書院